

成 佛 觀

堀 内 義 光

形而上學の根本問題として物質を以つて世界の本體となすか、或ひは精神を以つて世界の本體となすか。換言すれば物質が本原的實在にして精神は夫れから派生せる陰影に過ぎぬものとなすか、或はその逆と観るかの唯物論、唯心論の問題である。

フオイエルバッツハ (Feuerbach 一八〇四——一八七二) の唯物論に依れば人間と自然との外には何物も無く人間よりも自然よりも、より高級なる實在と稱するものは實は人間の宗教的想像が生んだもので畢竟する處我々個性の想像的反映に過ぎない。隨つて思惟と實在との真正の關係は實在は主體であり思惟は屬體であると云ふのである。マルクス (H.K. Marx 一八一八——一八八三) の唯物約辨證法亦然りである。即ち彼れに依れば觀念世界なるものは畢竟する處人類の頭腦の中に移置され移譯された物質世界に外ならないのである。故に物質は精神に先在すると言ふ結論を生むのである。此の世界觀は物質を以つて世界の辨證的法運動の主體たらしめ茲に唯物史觀たる認識の方法が成立するのである。

ヘーゲル (G.W.F. Hegel. 1770—1831) の唯心的辨證法に依れば、世界は自然及人事を通じて絶對者としてのイデー (Idea 理念) 若しくは、ロゴス (Logos 理) の發展の現れと觀る故に思惟行程は現實世

界の創造主であつて、現實はたゞ思惟行程の外部現象たるに過ぎないのである。マルクスは此の唯心的辨證法に對して逆立ちして頭で立つて居ると稱し「我々は神秘の外殻の内に合理的な核心を見出す爲めにこの逆立ちした辨證法を更らに顛倒せしめなければならぬ」とて之れに對して倒逆法を以つて酬いたのが彼れの所謂唯物的辨證法にして彼れはこれを以つて從來頭で立つて居たものが足で立つに至つたと提言したのである。マルクス主義者の理想境とするところは、此の原理に基いて物質の均等に依つて公平なる分配を有し、夫れが延いて精神的頭腦的にも當に平均を持つ社會を實現せんとする様である。

天台家の法界觀は中道實相の理を以つて世界の本原的實在となし此の實在より縁に隨つて生起せる現象世界を大別して依正二報となすのである。隨つて正報を主體とせば依報は屬體であるが故に正報を十界に分てば依報又自づと十界を成ずるのである。十界とは大別すれば迷悟の二を出でない。然らば迷悟を生むべき中道實相等の一理は迷悟の矛盾を包含せる實在なりやと云ふに茲には迷悟未分の眞如となし、迷悟は隨縁生起の結果とするのである。宛然たる法性眞如（中道實相の理）は無始無終本有の實在である。此の實在より顯現流動する者に自然有り、人類あり人類には迷者あり、悟者ありとすれば迷悟を生む眞如は逆觀的に推理して在纏眞如と云ふのである。即ち中道實相の理は非迷非悟

の邊に約して迷悟未分と云ひ、悟と迷を生むの邊に約して在纏眞如と云ふのである。然らば中道實相の一理は實在としての夫れ自身は不變眞如なるが、起滅の現象に於ては隨緣眞如である。こゝに於て素朴的には中道と稱するも顯徳門に約しては法身と稱するのである。かくて天台は當然唯心論なるを以つて、機械的必然因果性の上に立てられたる唯物的、非價值的、非生命的、自然的、流動連鎖を目的觀に移して、中道實相の理は絶對價值的生命にして常に現實を創造し進化せしめつゝありて其方法は正しく因果的法則を辿るものと説明せねばならぬ筈であるにも拘らず、彼等は宛も之を以つて倫理學や物理學の法則の如く夫れ自身には生命活動無き單なる理として扱ふが故に抽象概念に過ぎぬのである。當家に於ては本原的實在は法界周遍の唯心の一大圓佛にして是れを本佛と云ふのである。

此の本佛を吾人は抽象して體用の二つに分けて考ふる事が出来る。體とは法身であり用とは報應二身を指すのである。更に體本用迹は法華壽量品の六或示現の説相に依れば或説己身己示或説他身他示と稱するを以つて豈獨り世々番々應迹の佛のみが本佛と云へようか、六道の衆生乃至は草木と雖も皆是れ本佛の顯現であり、本佛體内中の現象である。茲に於て吾人が法身を抽象して考ふれば明らかに不變眞如なるを以つて此の本覺は無作本覺の如來であり、可能性としてのみ此の中に三身を考ふる事を得るのである。けれども我家の本佛は抽象概念ではあり得ない、事實具象的な本佛は常に報應の二

身乃至十界の身を現じて止まぬのである。是れを時間的に法身の體在つて後に應用垂迹すると考ふるのは天台家であつて、我家に於ては説明の次第上前後的に體用本迹と云ひ、又は法報應と云ふも實には更に次第前後無き、體用同時存在であり、同時顯發である、是れを三身の本有無始無終と稱し茲に於て法界一大円佛の人格的稱語は成立するのである。然るに本覺果海中に在りて實には迷に非ずして迷ひ、生死に非ずして生死するは何ぞ。吾人に云はしむれば是れあるが故に本佛の妙用は不可思議である。何となれば本佛を直觀するの世界は不變真如の世界にして單本覺であり、論理的、先驗的、普遍的、絶對價値的實在者の世界にして、若し一度思惟と反省の重に來ればその世界は可能性として永遠の彼方に在る絶對完全者と云はねばならぬ最高人格である。さればこそ我家に始覺即本覺と稱して、吾身は本覺無作三身の如來なりけりと始めて覺知したるとせよ此の能覺知の智用に酬ひらるゝ所覺知の體は本覺の如來である。斯くて迷雲は忽ちにして輝く光明と變じたりとせんか、本有の覺體に一如せるを以つて茲に生死因果の其まゝに金剛不壞の生命となるのである。此の生命は時間的には遂ひに本有なるが故に三世常住となり、空間的には妙樂大師の一身一念遍於法界の無限大となるのである。本有にして且つ周遍なる者の缺減する事は論理の許さざる事極めて明瞭である。然るに經驗的、現實世界に隱顯を生ずる事は不可思議なる妙用と云はねばならぬ。經文に如來秘密神通之力とは蓋し此の

事ならん。斯くて始覺の佛は茲に成立したのである。

次に當然豫想さるべきものは此の佛に依る衆生教化である。此等の始覺者に對する法悅の淺深のバロメーターとして我家の六即の位が立てられるのである。是れに就いて考ふるに飽迄も吾家は本覺果海中の吾れの自覺と、感激の上に立てらるゝ始覺であつて茲に當家の特色が発見さるゝのである。台家及び諸宗乃至あらゆる宗教、道徳、倫理の如きは可能性としての向上の一面を説くのみなるを以つて永劫不成佛にして因中の迷者として終らねばならぬのである。吾祖の諸宗無得道墮地獄の根元と謂へる意味ふべきである。

壽量品の佛が五百塵點の昔に成佛したと云ふ事は正しく本有の始覺佛と云ふ事である。随つて法身本覺が本有なると共に報身始覺も亦本有である。始覺が本有なる故に此の法界は素朴的現象に非らずして本有の光明(本佛の始覺を通した)に照らされた本覺果中の正依の二報である。此れを本佛の每自悲願と云ひ、愍念常に止まざる潤ひある中に生息して居る吾々であるとしたならば、吾々は遂に佛界縁起の故に本佛の愛子である。愛子の自覺成りて茲に感激の唱題、報恩の生活は展開されるのである。

昭和五年九月廿八日